



黒田清綱の歌業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004559

黒田清綱の歌業

はじめに

黒田清綱は日本の西洋画史上で「西洋画の巨匠」と言われる黒田清輝の義父に当たる。御歌所派の歌人として活躍した清綱の業は、和歌史の上からは所謂旧派（注1）として、殊にその後半生は正岡子規らの「アララギ」や、与謝野鉄幹、晶子らの「明星」などの新しい運動のなかに埋もれてしまい、殆ど評価されることのないものであった。辛うじて、小泉荻三氏の『近代短歌史（明治篇）』（注2）において「早く郷里鹿兒島にありし頃より八田知紀について歌を学び、明治八年門下の歌を集めて「庭たつみ」を出版し、爾来大正三年に及んだ。大正二年御製御拝見を命ぜられ、同四年には大書会悠紀歌詠進を仰付られた。桂園派としては強い格調の歌をつくった」と、そのおよその生涯が紹介され「歌想は平凡である。つぎの「桃山御

陵に参拝しける時」の一首は佳作」とされる程度のものであった。高崎正風没後を継いで御歌所長官に就任したと考えられていること（注3）は、大正天皇の「御製御拝見」と言うのがその実質であり、清綱の和歌の評価を高めることにはならないものであった。

このような清綱の和歌を改めて見直してみようとするのは、一つには、清綱の和歌についての考えが、明治国家が近代という時代を背負って動いていく過程に果たした役割の意味を考えてみたいためであり、もう一つには清輝の画業に関わることの実態を明らかにしたいためである。本稿では、第一の清綱に関わる和歌資料の整理から始めていくことにする。

第一 選ばれた清綱の和歌

清綱の和歌を評価の対象とした選集の中で、代表的なものとして

二つを取上げてみよう。

時代的に早いものの一つとして、『明治現存三十六歌撰 完』一冊(注4)がある。これは明治十年に発行されたもので、当代の代表的歌人を「三十六歌仙」に倣つて選び出し、歌合風に左右に番えたものである。編者の山田謙益の序文にも、それはよく現われている。

「今の御代に其名聞えし歌人、高き賤しきをえらばず、しげ原のよりより耳にとまりたるを、もしほ草かきあつめたるが、つひに三十まり六首の数になりにたれば、歌仙の色紙形にならひて、作者のさまをも、春夜のおほろげながらに写したらましかばとて云々」(以下、引用に当たつては私意により句読点、濁点などを付す)とある。現今の大家と認められる歌人の詠を、身分の上下に関わらず集め、歌仙形式に倣つて編集したというのである。

清綱は、第二番に右の間宮八十子と番えられて、左の位置にあり、百合の題にて「人しれぬ思ひの露やおもらん かたぶきたてるひめゆりの花」の詠があげられている。可憐な百合が露の重みで傾いて咲いている様を、忍ぶ思いによる涙の露の重さかと疑う心情を詠っているものである。恋の思いを消えゆく露にみたもので、類型的な表現とはいえるものの、一面、繊細な感覚を表現したものである。

その順番も、三十六番のうち二番目であり、第一番の三条西季知と加藤千浪とに続いており、歌の巧みさと、流派に拘らない地点での

評価の高さがあつたものと考えられる。

次には『東京大家十四家集 全』一冊がある。明治十六年に発行されたもので、代表的な歌人十四人の歌を四季、恋、雑、に分類したものである。平井元満の序文に続いて付された「附言」から、本集の概要を知ることが出来る。

「此歌集ハ徳大寺宮内卿より、現今の歌人十四人に去年の一月より此方、よみ出たる得意の歌三千首づつ書きてよと、所望有しにより、各短冊に書きてまいらせたる歌なり。それを宮内卿より、天覧に備へ奉られるを、よみ人の名を匿して、おのおのよろしと思はん歌、甲乙丙三等に撰びて奉らせよと、うちうちおほせごとありて、其ごとくえらび、宮内卿へ出されしよし伝へ聞侍れど、其撰びのほどは、いまだおほやけに聞えざれば、歌計をよみ人の名を書加へ写したるなり。作者の姓名左にする。正二位嵯峨実愛 従三位山本実政 従四位福羽美静 従四位黒田清綱 従五位高崎正風 権大教正本居 豊頼 従五位鈴木重嶺 従五位間島冬道 従五位三田葆光 黒川真頼 池原香釋 伊東祐命 小出榮 松波資之」

徳大寺公が選び出した十四人の歌人は、その殆どが堂上派、あるいは御歌所派と称される人々で、その限りにおいて明治天皇を中心にして近代国家への道を歩んでいく日本を示すに格好の歌人を選び出した歌集となつているものといえよう。当初は匿名にして天覧に

備えたが、その後、作者名を付して公開されたという経過は、正にこうした意図を、天皇の側近として優れた歌人が居り、その象徴的意味を和歌が荷ったという時代相を示しているものと見られる。この集の意図は、歴史上の人物を詠じた歌（当時においては「詠史」の部に相当する）を見ることによつて容易に知ることが出来る。

崇神

豊額

隠り世のありてふ事をさとりての後こそ神はかしこかりけれ

君思如雨露

重嶺

雨露は草木ばかりを物皆にかかるは君がめぐみなりけり

頼朝公

葆光

足たたぬ蛭の小島に年を經ていながら人をなびけつるかな

楠公

同

石よりもかたき心はくすの木のたふれて後ぞ顯れにける

楠氏

実愛

君がその旗手の菊のかをらずは南の山もむなしからまし

菊地武時

榮

君がため思ふ心の一すぢの征矢のさきにはたつ神もなし

神であり菊に象徴される天皇は、再びこの世に現われ多くの恵みを垂れている。その尊い天皇の系列に連なる南朝を主とする忠臣によつて、国家が形成されてきた過程を詠っている。明治天皇を頂として国家が出来上がったことを寿ぐ集となつていたのである。

さて、十四人の歌人はそれぞれ得意とする分野において詠歌したのであり、それは各部立での歌数から明瞭に窺うことができる。全体は春八十九、夏六十二、秋七十九、冬六十一、恋四十五、雑八十四首の構成となつている。四季の歌はほぼ同じ数であり、恋の歌は極端に少ない。これは、勅撰和歌集の伝統から見たとき、その形を外れており、恋歌の位置の低下があつたことを示していると言えよう。

清綱の場合、春十首、夏五首、秋六首、冬四首、恋二首、雑三首を詠進している。恋の歌は、同じように少なく、四十五首で構成される部立ての終わりに近い箇所二首載っている。

奇橋恋

清綱

あふと見る夢の浮き橋現にもかからばいかに嬉しからまし

奇木恋

清綱

さくら麻のをふの浦梨うら若みなる時しらぬ恋もするかな

この歌は『古今和歌集』からの本歌取となつており、更に、奇物

歌として詠まれており、形式においても内容においても、平板な傾向をもつ歌であることは明らかである。

初めの歌は「恋わびてうち寝る中に行きかよふ夢の直路はうつつならなむ」（五五八番）を本歌とし、次の歌は「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寝てかたらはむ」（一〇九九番）を本歌としている。

二首共に本歌の趣意を特に深めている訳でもない。初めの歌は、恋の夢路が現実となればよいものをと願う心を、「夢の浮き橋」という雅語を用いて、それが現実となればどんなに嬉しいかと率直に表現したものである。次の歌は『古今和歌集』で東歌に部類されているものを、その意をよく汲みつつ、東歌のもつ直截的な恋の感情表現を、若さ故に陥ってしまう恋の意味へと変えて、本歌の持つ強い情熱をやや弱めた調子で詠んでいる。

本歌を良く捉えてはいるものの、恋の歌としてはきわめて日常的な表現に終始しており、感情の薄い歌となっている。清綱は恋の歌には余り得手ではなかったと言つて良いであらう。

これに対して雑の部にあつては、三首ではあるが、その内、社頭祝、寄道祝の題を持つものは、集の最後を飾る祝賀の歌八首の中に含まれていて、幾分か評価されてよいものがある。

社頭祝

清綱

五百枝さす神垣山の真榊はさかく御代のすがた也けり

寄道祝

清綱

世とともに開くる見ればしき鳥の道の奥こそ果なかりけれ

二首ともに類型的な表現を用いているとは云え、祝賀の意は充分に現わされている。殊に「寄道祝」の歌は、明治の開化の世において敷島の道としての和歌は、その奥が深く果てしないものとして詠じられている。和歌が明治の世に果たす役割を良く認識していたことを示すものとなっている。これは、次に続く祝賀の最後の歌が、実政の歌で、同題のもとに「あまてらす神の御代より一すぢにきみがめぐみを敷島の道」と詠んでいるのと同じ内容であり、和歌の持つ力を改めて認識した人々の明治中期の情勢を良く反映したものと見られる。先の「明治現存三十六歌撰」よりは、一歩進んだものが見えている。

こうした恋の部と雑の部のあり方に対して、四季の部の歌においても、それなりの特徴を指摘できる。

四季の部の清綱の歌には、景情をよく見つけて素直に詠う姿勢が窺える。入集した歌の数においても、例えば春の部においては、八十九首中十首を占めており、他の十三人との比較においても上回っ

天才が認められていたものと判断される。

題のみでいえば、野亭梅、稻荷詣、花園鶯、柳経年、海上帰雁、松同花、河上花、静見花、野雲雀、若鮎の十題であり、江戸時代に集成される類題集の中には多く見いだされる題であつて、特に目新しいものではない。しかし、その歌いぶりにおいては幾分か注目されるものがある。

野亭梅

清綱

里とほき野中の庵に梅の花さける隣はある世なりけり

「野亭梅」と題しては、寂しい宿に梅の香が漂い春の喜びを現わし、人待つ心を現わすことが基本であつた。江戸時代も末期の嘉永七年（一八五四年）に出版された『類題鴨河五郎集』（注5）を見ても「とふ人もなき山里の梅が香にたが袖まちて風の吹くらん」と「山家梅」を同じ心で詠んでいる。

清綱が学んだ桂園派の祖、香川景樹の『桂園一枝拾遺』（注6）中の「野亭梅」と題する歌には「故郷の春日の里に狩にいて野辺にまづさく梅の花見む」とある。景樹は、『伊勢物語』第一段を念頭に置きながら、だれもやって来ない野辺の家に梅の花を見に行こうとする心に、恋の気分を盛り込んだものである。

清綱も、一人居の寂しさをそのままに詠うのではなく、隣の家の

庭に咲く梅を見て、人恋しさを詠うのである。景樹の歌が念頭にあつた本歌取であるかも知れないが、そうした雰囲気にも、我が隣人に重点を移して幾分かの新しさを加えているのである。

花園鶯

清綱

かざさんと思ひし花も鶯の木伝ふ見ればをられざりけれ

この清綱の歌にも、幾分かの工夫を見て取ることが出来る。鶯の木伝う様に枝折りもできないと言う。同じく『桂園一枝』に「花園鶯」と題して「をしてみても鳴くとはすれど鶯のこえのひまより散るさくらかな」とある。鶯が木伝い歩くので桜がはらはらと散る様を、一声また一声のその間に花びらが散ることだと繊細な感覚の中に詠み上げた歌である。そうした心の動きを、清綱は鶯への憐れみとして、挿頭にもできない花見の情を、鶯への優しさとして詠うのである。もちろん題として「花園鶯」と「花間鶯」との違いは当然あるものの、花と鶯との関係において、両者の心の働きには相違を見て取ることが出来る。それを清綱の心の工夫、心情的には一段の優しさの表現と見ることが出来る。

こうした一つの工夫は次の歌にも見ることが出来る。

海上帰雁

清綱

漕ぎつれし船とも見えてわたつみの霞の浪をかへる雁がね

海を行く雁の列を、船の連なる姿と見立て、霞か浪かの定まらぬ境のなかに消えていく様を美しく詠んでいる。これも『桂園一枝拾遺』

の中の「海上帰雁」と題する「折しもあれもろこし船につらなりて

松浦の沖を帰る雁がね」に類似した、あるいはむしろ、本歌取りしたものと考えられるものである。香樹の歌は、遣唐使の船であろう、松浦の海岸を立っていく後を追うように帰る雁を、長い一列の線として詠っている。やや観念のなかに沈みながらも、船と雁とが遠く連なる様を美しい風景として詠い込んでいる。清綱は、船と雁との余りに近接した関係を、雁に焦点を絞り、言外に船の連なる様を残しているのである。香樹の歌のもつ美しさを、霞をかけることによってなお一層際立たせ、聴音の効果をも狙っているのである。

わずか三首ばかりを例としてみたのであるが、桂園派の一人としての歌風は良く現われているものといえよう。そのことを強調すれば、先に、清綱の祝賀の歌に、和歌に寄せる特別な思いの深さを見た。

それは、香樹においても同じ事であって、『桂園一枝拾遺』には次のような歌が見える。「寄道神祇」と題して「閨ならでたどどしきは目に見えぬ神をしるべの敷島の道」とある。敷島の道を神の加護と捉える姿勢が、殊に強く現われている。桂園派として、和歌の

道を重く見るのは、江戸時代のみでなく、明治という天皇が復活した時代にはよりふさわしいものであり、それはまた清綱の心を強く捉えていたものと言っても過言ではないのである。

第二 清綱の和歌集

清綱の和歌集という言い方には二種類のものが含まれている。一つは清綱の詠んだ歌を集めたものであり、もう一つは、清綱が他人の歌を集めたものである。

清綱の詠んだ歌を集めたものには、門人によつて編集され、三編ある。三集共に『灌園歌集』（注7）と題しており、初篇は明治三十年八月の菊地武則の序文をもっている。その序文によれば、清綱は社中の人々と『庭たつみ』と題する集（全一五冊）を出版した。しかし、「大人の家集」のないことを憂え、この集を基に「記憶に存する」もの等を加えて、新たに部類して『灌園歌集』と名付けて編纂したという。二篇にも菊地武則の序文があり、初篇ばかりでは不足であるとの「社友」の提言があったので、清綱の手を借り、また「をしへ子」の記録等を加えて第二篇として編纂したという。この篇には明治三四年八月付けの三浦千春が記す奥書が付されている。それによれば、清綱が編纂に携わり、集の体裁は『四季恋雑』にわけ、殊に「俳諧の部」を立てたのは『古今和歌集』に倣っただけでなく、

近ごろの歌が「風致といふことを忘れ、ひとへに新らしきをもとめ、調にかかはらず」詠まれていたので「正雅と鄙俗とのけじめ」を明らかにするためであるという。更に、その歌風は「大和魂の雄々しく、すがすがし」との評が付いている。この篇には明治三十五年八月出版の奥付が付いている。

三編は、福崎季連が編纂した旨の序文があり、金丸俊胤が補足して大正四年四月に上梓したとの序文がある。出版は大正四年五月となつてゐる。その形態は二篇と全く同じである。全三編の部立と歌数は、次のようである。

	春	夏	秋	冬	恋	靜寂	哀傷	祝賀	詠史	雑	俳諧
初篇	一四三	一〇三	二二五	六一	一九				三九	七三	
二篇	八五	六九	九五	五五	一九	三二	二九	五五	五二	二〇	五一
三篇	六五	五七	七五	四六	一六	二七	三〇	五二	五〇	六七	三三

この一覧からも、先に問題とした恋の部の歌数の少なさが目に付く。

初篇の恋の部の題を見てみると、春恋、夏恋、秋恋、冬恋、初逢恋、夢中逢恋、絶後逢恋、馴不逢恋、奇木恋、奇魚恋、奇獸恋、奇駒恋、奇筆恋、奇珠恋、奇車恋、奇弓恋、奇水恋、奇雨恋、奇天象恋の十九題である。四季の恋四首と奇物歌十一首と時間軸に沿って展開す

る典型的な恋四首の三種類であり、平凡な発想から詠まれたものである。たとへば、第一首めの「春恋」は「春の野の小松がくれの早蕨のもゆとも人のしらぬ我恋」であり、小松の下の早蕨の芽吹きに初恋の心を託したもので、奇物歌風な平板なものとなつてゐる。

しかし、二篇、三編においては、やや事情は異なつてゐる。二篇では、待恋に始まり憚人絶恋に終わる十首と奇物歌が九首であり、三編では、連夜待恋から見書増恋までの十二首と奇物歌四首である。奇物歌が多いことは否めないが、時間軸に沿つた恋の歌には、素直に恋の気分を現わしたものが見られる。例えば、三編の「連夜待恋」では「片われの月のまどかになるまでも夜ことながめて君をこそまで」とある。片割れ月が満月になるまでも、眺め続けて君を待とうというのであり、その真心は良く伝わってくる歌である。

『瀧園歌集』において、次に注目されることは、二編の序文に記されている、「古今和歌集」に基本の形を採つて編集されたということである。これは、桂園派としては、当然の事ではあるものの、「古今集はくだらぬ集に有之候」と、正岡子規が「再び歌よみに与ふる書」（注8）で非難の声を挙げたのは、二編が出版されるよりも四年前の明治三十一年であつた。しかし、この子規の叫びは、同じ文の統きで「香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之候。俗な歌の多き事も無論に候。併し景樹は善き歌も有之候。

自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。」との言い分に関係している。言うまでもなく、子規はやみくもに『古今和歌集』をすべて非難したのではなく、その中に見られる偏固な理論的な詠い振りに注文をつけたのである。それ故に、『古今和歌集』風の詠いかたをしても、景樹には良い歌があるとしたのである（注9）。清綱が、この子規の叫びをどのように受け取ったかは、明かではない。しかし、景樹を範としながら『古今和歌集』に拠っていた清綱には、却って一種の確信を与えるものとなったのではないかと考えられる。それは、同じく序文に言う「俳諧の部」を設けたことの意志の表明に良く現れている。「俳諧の部」は「風雅と鄙俗のけじめ」をつけることであつたという。

二編の「俳諧の部」の第一首めは「をりにふれ事につけたる」として「門松のうへにたづがね聞ゆなりこやことほぎのはじめなるらん」とある。「正月祝」として詠まれたものである。これを「俳諧」としたのは、上の句の門松と鶴との取り合わせの拙さと、下の句のややく語体となった調子の崩れに因るのである。「調べ」とは、形式と意味との調和であるとする景樹の主張は、清綱においては確かに守られているのであり、同時に、和歌が新しい時代に生きるための「けじめ」だけは保持していたのである。この「けじめ」は、『歴代歌撰』の恋に対する考えの中にも、明確に現わされている。

『歴代歌撰』は清綱が自ら編纂した私撰集で、明治三十七年に出版されている（注10）。その意図は「緒言」に明らかである。「おのれ日頃ふるき歌ふみども見もてゆくままに万葉集はいふも更なり古今集以下二十一代集及び新葉集のうちより心に適へる歌ども一ひら二ひらかきとめおきつるがつもりつもりて若干の数になりたればそをひとつにかいつらね飯に歴代歌撰と名づけていにしへの影見る鏡草とはなしぬなり」とあり、万葉集及び古今集以下二十一代集と新葉集より清綱が「心に適へる」と考えた歌を類集したのである。

その基本的な方法は、勅撰和歌集と部立においては同じである。四季の部は、春百八十四首、夏百九首、秋二百三十七首、冬百十八首、となつている。春と秋は、夏と冬の部のほぼ二倍の数があり、春と秋は、夏と冬に対して重視されており、なおその中で秋が重んぜられているのは勅撰和歌集が採っている方法と同じである。

恋の部は百五十七首ある。四季の部の六百四十八首と比較して著しく数は少なく、これは勅撰和歌集が、四季の歌と恋の歌とをほぼ同数採ったこととは大いに違っている。しかし、この恋の歌の少なさは、先に見た『東京大家十四家集』でも同じであり、何よりも『瀧園歌集』が採った方法とも同じなのである。御歌所派の一つの特徴と言つて良いものである。

離別の歌は二十六首、哀傷の歌は三十五首、祝賀の歌は三十五首

あり、これに大嘗会の歌として七首が併置されている。次に、羈旅の歌は五十一首、雑歌は百五十七首である。これらの歌数の比率は凡そ勅撰和歌集のといつてよい。

万葉集に始まる集別の歌数を見ると、次のようになる。

	万	古	後	拾	後拾	金	詞	千	新	小	計	其他	合計								
春	三	五	六	一	八	二	三	五	四	九	一	〇	九	一	六	五	一	九	一	八	四
夏	九	一	八	六	一	七	八	八	三	九	九	八	七	三	三	〇	九				
秋	二	六	六	四	一	五	二	〇	一	三	二	三	二	九	一	九	二	四	五	三	七
冬	一	六	三	七	一	一	七	二	三	六	六	一	四	〇	二	一	六	二	一	八	
恋	五	七	四	四	二	三	一	五	九	四	六	八	一	八	一	八	三	四	一	八	七
離別	五	一	〇	一	五	〇	一	〇	一	一	二	四	二	二	六						
哀傷	一	八	七	三	二	二	一	一	二	三	二	九	六	三	五						
祝賀	三	三	二	二	六	五	二	一	二	二	三	四	一	三	五						
羈旅	二	三	八	二	一	四	一	一	一	六	四	六	五	五							
雑歌	四	六	五	八	七	四	一	一	二	九	一	一	四	九	八	二	五	七			

(右表の横には部立名、縦には集名を、集名は略記した)

この一覧からは、凡そ次のようなことが見えてくる。

序文に言う、選集の対象とした集は、万葉集以下、新葉集に至る

までのすべてであることは確かではあるものの、清綱が採用した集は、極めて限定されたものであること。それは『古今和歌集』が一番で二百九十九首あり、次が『万葉集』で二百二十三首、後は『古今和歌集』に続く八代集が殆どであり、『新勅撰集』以下十四集はそれぞれ数首ずつに過ぎないという点(表の其他の項が、これに該当する)に良く現れている。『古今和歌集』の歌数が一番多いことは、桂園派としては当然のことであろう。次に、『古今和歌集』にほぼ同じ数の歌が『万葉集』から採られていることは、明らかに子規に始まる万葉調を重んずる運動に配慮したものであろう。両集をバランスよく取入れることによつて、一見したところ偏りのないものとなり、明治三十年代という時代の動きを良く見極めたものとなっているのである。それでいながら、序文に特に記された『新葉和歌集』は、僅かに五首(春二首、秋に三首)しか採用されていない。ここには、『新葉和歌集』が、宗良親王撰による南朝方の(準)勅撰和歌集であることが強く意識されていると考えられる。これは、先に『明治現存三十六歌撰』で見たと同じく、皇統を南朝に求める皇国意識の現れである。この意識は当然のことながら、二十一の勅撰和歌集に通じていることが、日本の歌学者として必須の条件であることを示す問題にも連なっている。

このような選歌対象となった集と歌数の問題から、次には内容に

関わって見てみよう。

恋の部の初めには、次のような長い識語がある。

編者ひそかにおもへらく。凡物はみな其根源と枝葉とを識別せざるべからず。それ我国歌は諸冊二神の唱和及須佐男命の出雲八重垣の神詠より起れり。其みうたは愛恋の情の充溢せる嗟嘆の御声也。されば、原素は、恋歌に在て、花鳥の詠物にあらず。即、万葉集相聞恋歌の事の部には、君臣父子夫婦兄弟朋友相互の愛恋贈答歌のみならず、別離、哀傷の歌迄も同部にまじへ載たり。是人情の至誠を述たる歌なれば也。かくの如き貴重の謂れある恋歌の元理をしらずして、後世、徒に男女間の浮きたる事のごとく心得述べざる輩多く、既に今より百年前のむかし、京都の片ほとり、伏見のさとに偏固なる某といふ古学者ありて、妄りに恋歌排斥論を唱しより、後の学者其僻説を妄信し、終に歌は花鳥風月に止めて、恋歌はよむべからずといふに至る。愚も亦甚だしといふべし。たとへば、画家における絵画其ものの本体なる人物肖像を捨て、山水草木のみを描けといふに異ならず。画家には、幸にかくの如き愚説をいふ者なきに、ひとり歌学者中に、この愚説を唱ふるものあるは、斯道における汚点とやいはん。慨はしき限りにこそ。因て、今万葉集以下歴代の歌集中、人情の切実なる恋歌を抄出して、以て大和歌の本領は君臣父子夫婦兄弟朋友間の愛情をいふにありといふ事を証明す。

和歌の發生を諸冊二神の唱和及び須佐男命に求めて、これを「神詠」と捉えるのは、是も『古今和歌集』以来の伝統的な系譜の中にあることの証明である。その源を「愛恋の情の充溢」と見るところに、清綱の和歌に対する考えが良く現れている。和歌では「恋」の歌にその情が最も良く表現されるとして、これを広く「君臣父子夫婦兄弟朋友」間の愛情に求めている。恋の歌として理解されてきた恋の情は、「人情の至誠」に基づく愛の情として定義し直され、儒教にいう身分による上下関係の絆の内に求められているのである。ここに、恋の情には倫理性が求められることになり、実直誠実な人生態度が想定されることが判る。

こうした具体相が『万葉集』にあるというとき、『万葉集』の「相聞」の持つ未分化状態は、却って正當なものとして認識されている事が分かってくる。即ち、『万葉集』の相聞の歌には、恋の歌ばかりでなく、別離、哀傷までも含まれているから、それらをすべて愛の歌であると言うのは、未分を未分と認めない論理である。『万葉集』の相聞歌の持つ未分な状態は『古今和歌集』以降においては、明らかに整理され、別離、哀傷などは一つの確立した部となっている。実際、『歴代歌撰』でも、別離、哀傷の部を立てている。こうした単純な矛盾の原因は、一つには、先に『万葉集』と『古今和歌集』

とからは同数の歌を選んだ問題にも関わっていない。時代の流れの中に自らの位置を決めようとしたことの矛盾が現れたのである。

その矛盾を『万葉集』の持つ「人情の至誠」で説明しようとした時、未分混沌の中に却って「人情の切実」を発見したのである。しかしこの問題は、先に見てきたように、清網が四季歌に比べて恋の歌を少なく選集し、幾分か恋の歌を不得手としていた資質にも関わっていない。それがまた、正当性を持って御歌所派として形成されていくところに、複雑な時代の有り様がみえるのである。明治三十年代という時代の和歌界には、子規の叫びだけではなく、他にも新たな動きが当然現れてきていた。与謝野晶子の『乱れ髪』（明治三十四年出版）などは、清網に言わせるならば、余りに淫らな世界であり、「徒に男女間の浮きたる事」として、非難される対象であったのである。そこに「けじめ」を見せることが、確とした生き方を見せる「ますらを」として必要な事であったと、二編の序文は言うのである。こうした状況を考慮に入れてみると、『歴代歌撰』で採られた恋の部の特殊な編纂のされかたが理解されてくる。

『万葉集』五十七首を、仁徳天皇の皇后が天皇を思ふ歌に始めて、読人不知の歌までを、愛の相手による身分と愛の有り方の違い別に選んでいる。次には『古今和歌集』四十四首を待つ恋の歌に始まる総論で示し、続いて『拾遺集』十五首では、現れる恋の歌を採り、

以下勅撰集の順を幾分変えて恋の主題の変化を辿り、『新古今和歌集』十七首で再び、恋の総論的な形で語り、それに続いて『続後拾遺集』の二首で、つれなき人を恨む主題を示して終わっている。

つまり、『万葉集』にあつては、身分の上下に従つて愛の種類と言ふべきものを、夫婦愛、友愛、純愛などに分類配列し、『古今和歌集』以下にあつては、集別に恋の時間軸に沿つて配列しているのである。身分の上下に従つて、それぞれに相応しい愛があり、それは時代が下るに連れて、待つ思いの深く成るものであると言ふのである。そこに一貫するものが「人情の至誠」であつたのである。しかし、この「人情の至誠」の理念だけで『万葉集』を特別な形で採り上げていくことを説明するのは難しい。まして、明治三十年代という時代相を持ち出しても十分な解答は期待できない。

清網はここに簡単ではあるけれども一つの解答を用意している。それは黒田清輝が始めた絵画の同人誌『光風』の清網の言である。明治三十八年五月の創刊号に掲載された「或人の質問に答ふるの書」と題する清網の論は、古今集の序文で人麻呂赤人を歌聖と言うことの「正確なる歌」を知ろうと欲するならば、万葉集を研究するの必要ありと始まっている。若し、この時古今集で「事足れり」とするならば、孔子を知ろうとする者が論語を捨てて中庸孟子に拠る事と同じであるという。つまり、「物は皆其淵源をたづねずに下流をの

み汲居ては生涯浮ぶ瀬あるべからず」と、本源を極めることを薦めるのである。それは亦、桂園派だからと言って古今集に拠ることが第一ではなく、「おのが愚昧の見解」を下すことに基づく「おのれ」の明確な自覚に発するものでもあると言う。

こうした論理は、桂園派、御歌所派、古今集風などというレッテルは「おのれ」の前に確かに小さな存在となってしまうのである。「人情の至誠」という意味はここに再び蘇ってくる。それは恐らく人間の根源的な存在理由を説明するものなのであろう。この根源的なものを更に解明していくことは、清綱の問題意識を超えたものであろう。このために『歴代歌撰』の四季の部は、再び勅撰和歌集と同じ形を採ってくる。

『歴代歌撰』の春の部を見てみると、その主題は、立春、霞、子日、若菜、鶯、春雪、梅、柳、早蕨、若草、春雨、春風、春の歌、春月、呼子鳥、雉、帰雁、桜、桃花、梨花、萇、杜若、山吹、蛙、藤花、春の暮の歌であり、新暦に対応した分類とはなっているものの、構成の方法においては新味はみられない。第一首めの立春には「春たつといふばかりにやみ吉野の山も霞て今朝は見ゆらん」が挙げられている。こうした穏健な歌を多く選んでいるのである。

この傾向は、『歴代歌撰』よりも後に編纂された『灌園歌集』の三編にも良く現れている。『東京大家十四家集』において見た清綱

の四季歌には、香川景樹の影響があったのであるが、それを抜け出して、対象を素直に見詰め、幾分か伸び伸びとした姿さへも見せている。

『灌園歌集』の三編の春歌には、次のようなものがある。

『都春月』と題する二首

みやこ人桜がりして帰りくる大路に匂う春の夜の月

春の夜のそぞろありきは面白しみやこの大路月も霞みて

都大路の都人は、いかにも穏やかであり、匂いやかである。春の月は臆の中に物皆すべてを美しく見せるのである。天平の面影さえも漂ってくるものがある。

「花下美人ゆく」と題しては、次の歌がある。

さくらちる下ゆくをとめかへり見よ花もさかりといふは一時

「花下美人ゆく」の題は、それ自身において、既に一種の新しさを背負った風がある。それを、乙女の姿に映しながら、短い命の美しい桜に重ね合わせるのである。老いゆく者の惜別の情が素直に現れていると言ってもよいであろう。こうした感情もまた、清綱のいう「人情の至誠」というものであろう。とすれば、清綱は四季の歌の中に愛の情を込めているのである。それはまた、『新古今和歌集』において完成を見る方法、四季歌は恋の意を含み、恋歌は四季の心を含むということの新しい再現になる。清綱は、「おのれ」を見つ

めつ、新しくもまた、伝統の中に身を潜めて居たことになる。

おわりに

黒田清綱の和歌について、他から評価された歌の掲載されている『明治現存三十六歌撰 完』と『東京大家十四家集 全』を、清綱の歌を集めたものとして『瀧園歌集』初編、二編、三編を、清綱が編集した私撰集『歴代歌撰』の計六つの集を、あらあら検討してみた。

明治十年代から大正中中期までの軌跡は、香川景樹の影響を順次抜け出して、対象を静かに捉える歌への変化として見る事が出来た。

それを新しさと言ったとしても、基本的には、勅撰和歌集の方法と意味を身に付けた上でのものであり、革新的と言えるものでなかったことは確かである。しかし、その詠歌する姿を、時代の動きの中に置いてみるならば、時代に決して無関心であったとは考えられない。

むしろ矛盾を承知しながらも時代の主張を取入れようとしていた形跡が窺える。その結果、『古今和歌集』を基底に置きながら、『万葉集』をも尊重することになり、この兩者の間を「人情の至誠」という視点から結ばうとしたのである。この「人情の至誠」の心は、「君臣父子夫婦兄弟朋友」の間を結び付けるものであり、「人情の切実」さにおいて、愛の歌として認識されるものであった。同時に、それは明治の国家が人々に求めたものであった。ここに、清綱の和歌は

天皇を頂点とする国家に正当な位置を獲得出来たと評価するには、未だ早計である。しかし、誠心素朴な眼が捉えた対象は、意外に強靱な精神に支えられて表現されていたとは言ってもよいであろう。一つの矛盾を新しい精神の中に包み込んで生き伸びていく姿勢こそ、

明治という時代が必要としたものであった。それはまた清綱の詠史歌などを検討することによってなお明らかになることである。そうした作業の結果から、清綱と清輝との関係、和歌の伝統に関わった清輝の絵画について考えて見なければならぬ問題が浮かび上ってくる。『歴代歌撰』において、絵画の有り方を言う清綱の姿勢は、こうした問題の一つであるが、それらの問題は、次の稿に譲らなければならぬ。

注

- 1 与謝野晶子は御歌所派などを旧派と呼んで「明治の旧派のやうに独創の無い、進歩のない、平凡陳腐な、回顧的、常識的、概念的、類型的、非情熱的な題材にのみ停滞しているもの」と、激しい批判をくだしている。『晶子歌話』（天祐社、大正八年刊）十頁。

- 2 白楊社、昭和三十年刊、一八二頁。

- 3 『現代短歌大系 第1巻』（河出書房、昭和二十七年刊）収載

の歌人小伝の項、四三二頁。

4 右記『現代短歌大系 第1巻』収載のものを参考にして、立命館大学図書館蔵白楊荘文庫本に拠る。次に取り上げる『東京大家十四家集全』も同じ。

5 架蔵本に拠る。初編から第五部まである『類題鴨河集』は、広く各階層の歌を集めたものであり、江戸時代末期の和歌の特色を見るには格好のものと言える。

6 『校註国歌大系 第十八巻 近代諸家集 四』（国民図書株式会社、昭和四年刊）所収本に拠る。

7 初編、二編は立命館大学図書館蔵白楊荘文庫本に拠り、三編は国立国会図書館のマイクロフィルムに拠る。

8 『短歌の革新』（創元社、昭和二十四年刊）所収本、四二頁。

9 子規の景樹に対する評価は変転が甚しく、その一定しない状態を、松井利彦氏は「景樹的歌論を下敷とした子規が存在し、その存在を子規的に否定し展開させたところに、子規短歌の世界があった」と苦渋に満ちた説明をしている。

（『正岡子規の研究』明治書院、昭和五十一年刊、一三三頁）

10 立命館大学図書館蔵西園寺文庫本に拠る。